

---

# 猫が見ていたその先で

赤神幽霊

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

猫が見ていたその先で

### 【Nコード】

N1481C

### 【作者名】

赤神幽霊

### 【あらすじ】

少年はデートの待ち合わせ場所に行く途中、猫を見つける。猫の視線の先をみた彼は。突然現れた白い手にどこかへ引き込まれた彼は、最後に少女と出会って……。

(前書き)

残酷な描写が多少？  
あると思いますので苦手な方は見ないほうが  
いいかもしれません。一応かなり抑えましたが。

猫が見ていたその先で

とある夏の日の話だ。

少年はその日、いつもより用事で帰りが遅くなった。だから彼はいつも通りの道ではなく、近道を使うつもりでいた。

手には紙袋一つ。

彼は急いでいた。彼女とデートの約束をしていたから。

近道である裏路地に入ったときのことだ。

急ぎ足で帰路に行く彼はふと視線を感じて立ち止まった。

気になって辺りを見回すと黒猫が一匹、こちらを見つめて動かないでいた。

別に彼は猫の好きそうな物を持っているわけでも好かれるような体質でもない。

猫は相変わらず一点を見つめていた。

まるで彼の姿など眼中にないと言わんばかりに。

よくよく考えると自分を見ているわけではないようだ。

ではこの黒猫は何に視線を注いでいるのだろうか？

疑問に思った彼は猫の視線を辿った。

「……何も無いよなあ」

視界には袋小路。もちろんそこには何も無かった。

俺は一体何を期待しているんだ。

彼はさっさと行くことにした。

最後に猫を見やる。猫が動く様子は無い。いや、急に猫は毛を逆

立て彼 ではなくその向こう側を威嚇し始めた。

何事かと彼は振り返った。

振り返って、しまった……。

「なっ……！」

彼はそれ以上何も言うことができず、突然現れた何本もの白い腕に体のあちこちを掴まれ何処かへと引きずり込まれた。

彼が消えた場所は丁度猫が見ていた所だった。

彼は、壁の中に消えた。

彼の意識が途絶えたのは一瞬だった。

気がつけば、先程と同じ所に立っていた。

唯一の違いは黒猫がいなくなっていたこと。

「何だったんだ、今の……」

彼はそう呟き、時間が無いことを思い出した。

「しまった！」

彼は走り出した。

おかしいな。

どれだけ走っても景色は変わらなかった。

本来ならとつくに待ち合わせの場所に着いているはずなのに。

道を間違えた？

いいやと頭を振って否定する。なにせ真っ直ぐ進むだけでいいのだから。

彼は再び走ってみた。

タッタッタッタッタッタ

「……？」

気のせいだろうか？ 彼は不思議に思った。今、足音が増えた気がしたからだ。

タッタッタッタッタッタ

「！」

聞こえた。よりはっきりと。それはまるで彼の後をついて来ているようだった。

彼は足を止めた。すると、それにあわせて他の足音も止まる

訳はなかった。

背筋に冷たいものが走った。

振り向いてはいけない。そんな気がした。

しかし、後ろが気になって仕方が無い。  
そうだ。きつとこの辺りを縄張りに行っている不良に違いない。彼  
はそう自分に言い聞かせて、恐る恐る振り向いた。

『ばーか』

その時。何者か　女の子の声が聞こえた気がした。

振り返った先。彼に向かって走ってくる首の無い人。  
人？　違う、死体だ。

死体が走る速度を上げる。同時に首から血柱が立ち上った。  
全身が総毛立った。

「あたまあ……おまえのあたまよこせえ……」

死体の腹にバツクリと開いた巨大な口が言葉を発した。

「うわああああ。くつ、食われる?!」

彼はそれを見てようやく走る速度を上げた。  
一直線だったはずの道になぜか右に通路があった。冷静な思考力  
を失った彼は何も気にせず、そちらに向かった。

『きゃはははっ』

またも女の子の声。しかも今度は笑っていた。

「えっ……?」

彼は体制を崩し、地に転がった。何かで足を滑らせたようだった。  
びちゃり、と服が濡れた。

彼は目に映るものに愕然となった。

自分が倒れ伏しているのは、赤い水たまりだった。赤い水は上か  
ら流れていた。

嫌な想像が頭をよぎった。

すぐ隣には建設途中で廃棄されたビルの入り口。階段がのぞいて  
いた。

よせばいいのに彼はその赤い水が何であるかを調べに、登れる所まで行ってみることにした。

というよりも、曲がった先が袋小路だったので、後ろから追ってくる首無し死体から逃れられそうな場所がそこしかなかったのだ。

「うつ……」

彼は後悔した。

完成している三階まで上り、階段と部屋を隔てる扉を開いた途端、凄まじい腐臭がした。彼は盛大に吐いた。

そして、一番目にしたくない物を見た。

堆く積み上げられた死体。  
うずたか

あの赤い水はやはり血だった。

死体の山の麓には穴が開いていて、そこから今度は壁に開けられた穴まで中の空洞を流れ、壁を伝って下まで流れ落ちていたということだ。

「おつかれさまでーす」

いつ現れたのか、そこには少女がいた。

ひらひらとフリルが沢山ついた黒いドレス姿。所謂ゴシックロリータの衣装だろうか？ を身に纏った彼女は口の端をニイと吊り上げた、歪な笑顔<sup>いびつ</sup>を彼に向けていた。

それは狂喜の笑みだった。

「あーあ、つまんないなあ。お兄さん。ちゃんとあの子に食べられてあげなきゃだめじゃない」

背筋が凍りついた。

こいつは本気で言っている。

彼は確信していた。

「ま、こつち側に来た時点であなたの人生は終わったようなものだけどね。ようこそ、世界の裏側、その一部へ。……あ、これってなんだか冥途の土産みたいね」

彼はもはや抵抗することを諦めていた。

彼が聞いているのかいないのかなんて、全くお構い無しに話す少女の前に立たれてから、体が金縛りにあったかの様に動かさなかった。

「さてお兄さん。そろそろお別れしましょう」

少女は膝立ちになると、彼の首筋に噛み付いた。

「うぐっ！」

少女は彼を咀嚼していった。

「ぎ、ぎゃ、が、ああああ！」

クチャクチャクチャクチャクチャ

ゆつくりと、焦らすように、なぶるように。

「が……び……だずげ……で？！ ぎいいいい！」

クチュクチュクチュクチュクチュ

彼が上げる悲鳴を聞きながら、彼が骨になるまでずっと、少女の食事は続いた……。

「やっばー。つい勢いで全部食べちゃった。太るかなあ……？ まあいつか。久しぶりの新鮮な人肉だったし。きやはっ。ごちそーさま」

血染めの少女は笑っていた。

彼の痕跡である骨は、山の一部と化した。

「さて、また誰か釣れないかなー」

そして少女は、上機嫌でどこかに消えていった……。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1481c/>

---

猫が見ていたその先で

2008年11月7日07時01分発行